

巻頭言

令和3年度に奈良県立医科大学医学部看護学科紀要から同看護研究ジャーナルとなり、デザインも一新され3年目となり19巻。発展とともに積み重ねられてきました。いうまでもなくこの3年間は、コロナ禍であり、データ収集や学会発表等の研究活動に大きな影響を受けました。

大学には、社会から教育と研究、地域貢献が期待されます。授業・実習指導、研究の実施、研究の成果は、学術誌やジャーナル等をとおして広く公表し、社会に貢献する必要があります。これらの両立やバランスについて、皆さんはどのように考え、どのように両立しておられるのでしょうか。日本の大学教員には、教育と研究の両立を困難と感じる者が多いという報告があり、困難感に影響を与える要素として十分検討されていないとしながらも「学問分野間での教育と研究の特性の差異」「教育活動の特性」があげられています。看護学教育において重要となる実習がこの教育活動の特性にあたるのではないかと考えられます。授業・実習指導と研究活動、ワークライフバランスいずれも重要で責任も重く両立が課題です。

2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申において「学生と教員を擁している大学が、自由な発想をその根源とし、教育と研究を一体不可分のものとして人材育成と研究活動を行っている仕組みが「知識の共通基盤」として社会を支えている」と述べられており、教育と研究を両輪とする大学教育の「重要性とともに、持続的な人材育成とイノベーションを生み出していくためにも、大学の研究力を引き上げていくことが重要である」とされています。将来に向けた大きな課題ですが、そのために今何が必要なのか、できることは何なのか意識してみることからはじめたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが変わり、活動の幅が広がりました。研究内容によって差異はあるでしょうが、研究活動も行いやすくなっていることを実感しています。其々が教育と研究の両立を目指しつつ研究成果を投稿し、看護研究ジャーナルが充実発展することを期待しています。

2023年8月
看護学科 学科長
川上あずさ